

グループ研究によせて

浜 口 哲 一

仲間と「ねぐら研究会」なるサークルを作ってから、早いものでもう5年になる。我が会は、今回紹介されている研究グループの中で、もっとも怠惰なグループであろうと自覚しているが、それでもこの5年間、ぼつぼつと取り組んできたフィールドワークはそれぞれに面白く、みんな活動を楽しんできたことは確かである。

この会ができたきっかけは、筆者が呼びかけて1979年から始めた、相模川の橋脚に集団ねぐらを持つハクセキレイの調査であった。何故、ハクセキレイを調べ出したのかというと、集団でねぐらをとるという習性に興味を感じたのはもちろんなのだが、それが大勢が調査に参加できるテーマであることも大きな魅力であった。そこに魅力を感じるのは、筆者が博物館で仕事をしていることとおおに関係があり、博物館の役目を、いろいろな情報を一方的に提供するだけでなく、市民とともに学ぶ場を作ることと考えて、いつも頭を離れない発想なのである。

ハクセキレイの調査は足掛け4年ほど取り組み、2編のレポートを発表した。そして、この調査に参加したメンバーを中心に、サークルを作って、いろいろな鳥の集団ねぐらを調べていくということになったのである。次のテーマとしては、カラスを取り上げ、これは神奈川県内のねぐらの所在を一通りまとめた。そしてこの2年ほど手がけているのは、ユリカモメの海上のねぐらである。これについては、なかなか面白いことが分かってきたのだが、海上の事で、いま一つ把握ができない。今冬はぜひ船を使った観察を考えたいと相談している。

さて、こうしたサークルで活動を進めていくうえで、慎重に考えるべき問題の一つに、得られた成果をどんな形で発表するかということがある。ちなみに我々の仕事だと、サークルを作る以前のハクセキレイのレポート2編では、それぞれ4名、7名の共著で、筆頭者は交代している。研究会を作ってから、カラスのレポートでは、研究会を筆者にして、参加者全員の名をあげ、その中でとりまとめにあたった者にマークをして示すという形をとっている。

こうした問題について筆者の考えは、端的に言えば、みんなで協同してやったことは、特定の個人が業績にすべきではないというものである。こうした考えに対して、いろいろな反論もあるだろう。責任の所在があいまいになるという問題もある。レポートには事実の報告だけではなく、考えも含まれているとすれば、そのオリジナリティーが誰にあるかは明確にされるべきという考え方もあろう。職業研究者として、名前を出す必要性を感じる人もいるだろう。しかし筆者には、みんなでわいわいやりながら、会の名でどんどん発表するといったおおらかさが、アマチュア研究のすそ野を広げるために、大切なことではないかと思えてならない。



アングラっぼいねぐら研の会報

鳥類研究グループ(1)

野生鳥類の生態や行動などを有志が集まって、協同調査・研究しようという動きが、各地で活発になってきた。従来から大学の研究室などを中心とした学生の活動が多かったが、最近では社会人が自主的に集まって共通のテーマに取り組むといった傾向が強くなってきた。

そこで、現在日本各地で、どんな目的でグループ研究が行なわれているのか、その概略をまとめておくことは、会員にとって有効な情報になるとともに、日本の鳥学研究のある一面を記録しておくという意義があると思う。

今回紹介したのは、とりあえず編者らが知っているグループ(団体)に、下記の要領で答えてもらったものである。他にも多数あると思われるので、次号も継続して紹介していく予定である。

なお、ここで対象にしているグループ(団体)は、原則として、日本鳥学会々員が中心となっていて、学術的な研究や保護のための調査などを行なっているアマチュアの集まりで、大学や研究所などが主体となっているところは除いた。(川内 博)



アンケート項目

グループ(団体)名	〈設立年〉
① 所在地(連絡先) 電話番号 ② 代表者(役職) ③ 事務局者(役職) ④ 目的・発足の趣旨 ⑤ ここ1~2年の活動内容 ⑥ 機関誌・連絡紙名(発行回数, 年間総ページ数, 版の大きさ, 印刷の種類) ⑦ 構成(会員)数(その内の鳥学会々員数) おもな職業 ⑧ 参加(入会)の資格・条件 ⑨ 年会費・参加費 ⑩ その他の特記事項	

ニホンハクチョウの会 <1973年>

- ① (〒060) 北海道札幌市中央区北5条西20丁目 医療法人 桑園中央病院内
☎ 011-621-1023
- ② 松井繁(会長) ③ 服部蛙作(事務局長)
- ④ 日本に渡来する白鳥を保護し、生態を解明するため、各渡来地の環境保全を図るとともに、広く自然保護思想の普及と学術文化の伸展に寄与することを目的とする。
- ⑤ 1986年にハクチョウに関する身近かなニュースを掲載する『白鳥ニュース』を創刊。会誌『日本の白鳥』No. 12号に第1~11回ハクチョウ類定時定点調査結果のまとめを掲載。87年ソ連邦の科学者からコハクチョウの日ソ共同研究の提案があり、その資料作りのため、定時定点調査の内容を拡大。88年には岩

手県盛岡市、北上市において第12回現地研修会を開催。北上市展勝地で、アメリカコハクチョウがコハクチョウと番いを形成して2羽の幼鳥を連れて来ているのを観察。会誌に報告を掲載予定。

- ⑥ 日本の白鳥(年1回発行, 100~150ページ, B5判) 白鳥ニュース(年2回発行, 4ページ, B5判)
- ⑦ 200名(約10名) 大学・高校・中学教師, 公務員, 医師およびその他の自営業, 主婦, 中高校生, 各地の白鳥愛護の団体他。
- ⑧ 白鳥を愛する人であれば、どなたでも可。
- ⑨ 年額3,000円

キョクトウ 極東鳥類研究会 <1982年>

- ① (〒080) 北海道帯広市稲田町 帯広畜産大学内 ☎ 0155-48-5111

- ② 藤巻裕蔵(代表) ③ ②と同じ
 ④ 極東における鳥学および鳥類に関する情報交換。主に文献紹介。
 ⑤ ニュースレター(英文。和文付録)を年2回発行。和文付録として1年おきに50ページ程度の論文集(ソ連・韓国の論文の翻訳)を発行。極東各国の研究者と文献交換。
 ⑥ ORNITHOLOGY IN THE FAR EAST(年2回発行, 約50ページ, B5版, ワープロ印刷)
 ⑦ 120名(90名)
 ⑧ だれでも入会可 ⑨ 年額1,000円
 ⑩ 英文ニュースをソ連・イギリス・アメリカ・中国・韓国・台湾・マレーシア・インドネシア・オーストラリア・フィリピンへ送付。

^{ガン}雁を保護する会 <1970年>

- ① (〒983) 宮城県仙台市五輪1-4-21-301 横田方 ☎022-293-3520
 ② 横田義雄(会長) ③ 呉地正行(事務局長)
 ④ 仙台市福田町のマガン群を密猟から守るために結成。かつては各地で見られたガン類も現在では限られた場所でしか見られない「特殊な鳥」になってしまった。そこでこの鳥の生態調査や教育・宣伝活動を行ない, ガン類の保護・管理を行なうことを目的としている。
 ⑤ 伊豆沼および全国のガン渡来地での一斉調査(毎月1回)を実施し, 各地もちまわりでシンポジウムを開き, ガン類の現状についての認識と会員間の親睦を深めている。また仙台市八木山動物公園と共同で, シジュウカラガンの羽数回復計画を実行。さらにソ連(カムチャツカ)と共同でオオヒシクイの標識調査を行ない, それと平行して「雁の里親キャンペーン」を主催し, 一般の人にもこの調査に参加してもらい, 調査費の援助を受けている。
 ⑥ 雁のたより(年2~3回発行, 約60ページ, B5版, ワープロ印刷)
 ⑦ 300名(53名) 公務員, 教員, 会社員, 自営業など。
 ⑧ ガンが好きなこと。またはガンに興味があること。「雁の里親」を含め, 全国から会員を募集している。とくにガンの渡来地をフ

ィールドとしている人大歓迎。

- ⑨ 年額 普通会員1,000円 維持会員3,000円 家族会員500円。

^{チョウガイ}鳥害研究会 <1987年>

- ① (〒305) 茨城県つくば市観音台3-1-1 農研センター 鳥害研究室内
 ☎02975-6-8925 ② 中村和雄(代表)
 ③ 松岡茂(事務局長) ④ 農作物の鳥害, 航空機と鳥の衝突, 鳥の糞による建物の汚染など, 鳥害に関する問題は多岐にわたっている。またそれらの問題を扱う人間は, まったく異なる分野でそれぞれ仕事をしてきていた。そこで問題解決の一助として, 相互の情報交換を目的として設立した。⑤ 応用動物昆虫学会大会の小集会で, 鳥害研究会を開催し, 鳥害をはじめ, 行動学・心理学関係の演者を交えた講演を行なっている。今年は鳥学会大会でも同様の企画を予定している。
 ⑥ 鳥害研究会ニュース(年1回発行, 約12ページ, B5判, ワープロ・コピー)
 ⑦ 60名(20名) 公務員, 会社員など。
 ⑧ 鳥害に関する仕事に携わっているか, 興味をもっている人ならば, だれでも可。
 ⑨ 年額1,000円(団体会員10,000円)

^{ニホン}日本鳥類標識協会 <1986年>

- ① (〒270-11)千葉県我孫子市高野山字堤根115 山階鳥類研究所 標識研究室内
 ☎0471-82-1108
 ② 黒田長久(会長) ③ (幹事)
 ④ 日本の鳥類標識調査の健全な運営と発展を図り, 鳥類の保護・管理に寄与する目的で, バンダーおよび鳥類標識調査を理解する人で構成し, 設立した。
 ⑤ 年3回の会誌を発行。年1回の総会をバンディングのエクスカッション付で各地で開催している。ちなみに第1回(1986年)はオオセッカを目玉に千葉県東庄町笹川で実施。第2回は山林の繁殖鳥を目的として山梨県山中湖で, 今年はシギ・チドリをメインに千葉県木更津市木櫃川で行なう予定。
 ⑥ 日本鳥類標識協会誌(年3回発行, 約80

ページ, B5版, タイプ写植印刷)

- ⑦ 300名(約100名) 教員, 公務員, 会社員, 自営業など。
- ⑧ 鳥に興味を持ち, バンディングに理解を示している方。全国から会員を募っている。
- ⑨ 年額3,000円 協賛会員10,000円

カワウ標識調査グループ <1987年>

- ① (〒270-11) 千葉県我孫子市高野山字堤根115 山階鳥類研究所内 日本鳥類標識協会 気付
- ② 福田道雄(世話人) ③ ②に同じ
- ④ カワウのバンディングを通して, 日本でのカワウの生息状況を調査する。バンディングを実施する人やカワウを調査する人, およびカワウに関心のある人の間で, 調査結果と各種の情報の交換を行なう。
- ⑤ 全国のカワウのバンディングネットワーク作りをし, 東京(不忍池)・静岡(浜名湖)・愛知(鵜の山)・大分(沖黒島)で, コロニー別に統一したカラーリングをつけている。リング付のカワウの追跡調査, 各地のカワウのコロニーと塹の調査, その他カワウに関する情報の収集を行なっている。
- ⑥ かわう(年2~3回発行, 4ページ, B5版)
- ⑦ 約40名(約10名) 自営業, 公務員, 団体役員, 教員など。
- ⑧ 会員制ではない。カワウのバンディングや調査のできる人, または関心のある人。
- ⑨ 会費なし。経費は各自で負担。
- ⑩ 今後, カワウ以外のウ類の情報も収集予定。

トシチョウ
都市鳥研究会 <1982年>

- ① (〒351-01) 埼玉県和光市本町31-16-901 ☎0484-62-7141
- ② 唐沢孝一(代表) ③ 川内博(事務局長)
- ④ 東京をはじめ, 各地の都市で野生鳥類を見かけることが多くなった。一時は減少の一途をたどっていたのが, どういう理由で目立つようになったのか調査・研究をするため, 有志が集まり発足した。
- ⑤ 東京を中心に, 首都圏での研究が主体。

しかし今後, 札幌・名古屋・大阪・福岡などの大都市でも本格的な調査を予定している。また海外の都市での情報も収集している。例会・シンポジウム・講演会などを年に5~6回実施。

- ⑥ URBAN BIRDS (年4回発行, 約80ページ, B5版, タイプ写植印刷)
- ⑦ 150名(約60名) 教員, 会社員, 元公務員など。
- ⑧ だれでも可。全国から会員を募っている。
- ⑨ 年額2,500円
- ⑩ 今春「都市に生きる野鳥の生態」(8+156pp)を出版した。

ねぐら研究会 <1983年>

- ① (〒225) 神奈川県大磯町西小磯753 齊藤篤方 ☎0463-61-6678
- ② (特になし) ③ 齊藤 篤
- ④ 集団ねぐらを持つ鳥について, 共同調査を行なう。
- ⑤ 相模湾沿いの河川に渡来するユリカモメのねぐらについて調査。
- ⑥ 季刊ねぐら情報(年1~2回発行, 約50ページ, B5判, ワープロまたは手書きフォックス印刷)
- ⑦ 約40名(5名) 会社員, 主婦など。
- ⑧ だれでも入会可。 ⑨ 年額1,000円

アズナガワ
梓川鳥類生態研究グループ<1974年>

- ① (〒943) 新潟県上越市山屋敷町1 上越教育大学 ☎0255-22-2411
- ② 中村登流 ③ ②に同じ
- ④ 河川の鳥の季節的変化を見る。あわせて各地の鳥その他の情報交換。
- ⑤ 月1回, 長野県東筑摩郡波田町の山麓の鳥々館に集り, 一泊して梓川で, 目下のところカワガラスとイカルチドリ^{チドリ}の個体数や活動状況を調査している。年1回位, 各地へ探鳥の旅に出る。
- ⑥ なし ⑦ 12名(12名) 公務員, 会社員, 自営業など。
- ⑧ 鳥の生態に興味を持っている人ならだれでも可。 ⑨ 会費なし
- ⑩ 「のめりこみバードウォッチング」(誠

文堂新光社)を出版した。

ジョウエツ トリ
上越鳥の会 <1988年>

- ① (〒943) 新潟県上越市東城町3-5-51
山本明方 ☎0255-24-6881
- ② 中村登流 ③ 山本明
- ④ 上越地方の鳥の状況を調べる。
- ⑤ 月1回、センサスコースを決めて、鳥のセンサスを行なっている。年1ヶ所を定め、次第に地域を変えて調べている。
- ⑥ なし ⑦ 20名(3名)公務員、会社員、自営業など。
- ⑧ 野鳥に興味をもち、少し調べてみようと思う人ならだれでも可。 ⑨ 会費なし。

タイワン トリトモ
台湾の鳥友の会 <1980年>

- ① (〒475) 愛知県半田市大高町1-5
☎0569-28-1006
- ② 平林秀雄(会長) ③ 陳宗銘(台湾代表) 平林秀雄(日本代表)
- ④ 台湾の鳥(野生鳥類)について、分布・生態を詳しく研究する。日本の野生鳥類を介して日・台の友好を深め、相互理解に資する。日本人に台湾の自然を紹介する(登山・賞鳥・探鳥旅行)などを目的としている。
- ⑤ 同志が集会し情報を交換。また中央山脈等の現地観賞会を実施。台湾会員の訪日の際には日本での探鳥、情報交換。台湾会員(台北市および近郊中心)は、観音山等の近郊での観察。現地賞鳥会(野鳥の会)との連絡・情報入手。
- ⑥ 白頭翁・ペタコ(年1回発行、約30ページ、B5版)
- ⑦ 約100名(1名)公務員、会社員、教員、学生、主婦など。
- ⑧ 年1回以上、日・台産鳥類の生態について記録を報告など。
- ⑨ 会費なし
- ⑩ 「台湾の鳥」改訂3版(約200ページ)を準備中

ニホン
日本イヌワシ研究会 <1981年>

- ① (〒520-23) 滋賀県野洲郡野州町行畑

482-57 ☎0775-87-1441

- ② 阿部明士(会長) ③ 山崎亨(事務局長)
- ④ イヌワシの調査・研究ならびに保護を目的として設立。広大な行動圏をもつイヌワシを調査するには、各地に散在する1~2名の調査者では限界がある。レベルのそろった調査者が、お互いに協力してイヌワシの生態を明らかにするとともに、各地のデータを収集、分析し、日本のイヌワシの現状を明らかにすることにより、イヌワシとその生息環境を保護したいと考えている。
- ⑤ 全国のイヌワシの生息・繁殖状況調査(歴年来) テーマを決めて全国のデータを収集・分析をしている。また年1回のシンポジウムと講演会を開催。さらに機関誌・ニュースレターの発行と、会員への文献資料の送付、文献資料検索コピーサービスなど。
- ⑥ *Aquila chrysaetos* (年1回、約40ページ、B5判)
- ⑦ 約90名(約20名)公務員、教員、自営業など。
- ⑧ 規約に賛同し、原則として地区委員1名、既会員1名の推薦が必要。
- ⑨ 年額5,000円

日本鳥学会近畿地区懇談会

<1978年>

- ① (〒606) 京都府京都市左京区北白川道分町 京都大学理学部動物学教室 百瀬 浩
または 江崎保男気付 ☎075-751-2111
(内)4091(百瀬),4079(江崎)
- ② なし(世話人6名) ③ 百瀬浩(2年毎に事務局は移転)
- ④ 近畿地方に在住する鳥学会々員が中心になって、互いに研究の成果を発表し、親睦を深める場をもつこと。
- ⑤ 毎年3回の例会を原則として、兵庫・大阪・京都で開催している。昨年は計9件、一昨年は計8件の研究発表・報告などがあり、毎回20名前後の参加を得がっている。
- ⑥ なし ⑦ 約60名(約20名)
- ⑧ だれでも可 ⑨ 年額500円

東邦大学理学部 海洋生物学研究室

東邦大学理学部は東京湾の奥部、千葉県船橋市にある。生物学教室は8研究室からなり、そのひとつが海洋生物学研究室である。ほかの研究室は生態学とか生化学、生理学などと生物学の分野の名前を冠しているが、海洋生物学だけはそうではなく、異色の存在である。たぶん名前だけならば日本中にひとつしかないだろう。

だが、研究面ではとくに異色ということはない。海洋生物を対象とした生態学的研究とまとめられるが、もう少しくわしくいうと、対象としている種や生物群にこだわり、いろいろな面からそれらの特性を明らかにしてゆく古風な、いわゆる生物学研究である。スタッフは秋山章男、風呂田利夫、長谷川博の3人である。秋山は干潟の底生動物を対象としてきたが、最近は九十九里一の宮海岸で砂浜に生息するスナホリムシと越冬ミユビシギの採食行動との関係の研究に力を注いでいる。風呂田は東京湾の潮下帯動物群集について、スクーバで潜水して直接観察したり、モーターボートから底泥とともに採集したりして、分布や生活史を研究している。長谷川は伊豆諸島海域の海鳥類の繁殖分布や生態、行動を調査している。これまで鳥島のアホウドリの繁殖状況の調査と保護研究に力を入れてきた。伊豆諸島のつぎは小笠原諸島と決めているがもう少し先になりそうである。

学生諸君は卒業研究で海だけでなく汽水域や淡水域の動物を対象にして野外調査を行なう。これまで鳥を対象に選んだ学生の多くは近くの谷津干潟や木更津の小櫃川河口干潟でシギ・チドリ類の採食行動を観察した。そのほかに不忍池のカワウや城ヶ島のウミウ・ヒメウ、銚子のカモメ類、湾奥のユリカモメ、行徳のスズガモ、沿岸部のサギ類、館山のゴイサギ・コサギ・クロサギ、埋立地のシロチドリ・コアジサシ、多摩川のカルガモ、江戸川のハクセキレイあるいはカイツブリ・カラスバト・イソヒヨドリなどが観察対象になった。時には房総丘陵のニホンジカや伊豆諸島のネズミ類など哺乳類を研究したいという学生も出てくる。研究計画さえしっかりしていれば、できるかぎり希望にそうようしている。

海洋は地球表面の約7割をしめ、大陸の上と比較して引けをとらないくらい多種多様な生物がそこに生息している。こじんまりとした研究室なので、それらすべてを視野に入れることはできないが、海にすむ生物の特徴を浮き彫りにできるような研究をめざしている。

学生には理論の構築というよりはむしろ、理論のすきまをうめ、生きものの保護に気をつかいながら、そのぬくもりとか、ほのかな潮の香りが感じられるような研究をするよう指導している。
(長谷川博)

特集について

1. 「鳥類研究グループ」ご連絡ください

本号に引き続いて、次号でもグループ（団体）の紹介をします。規模の大小は問いません。鳥学会の会員が主体となって（代表である必要はありません）、学術・保護などのために調査・研究を行なっているところは、本号2ページのアンケート項目にそって、ご連絡ください。

2. 続・地方鳥類誌を予定しています

本誌 №13（1983年3月）に、1970年以降出版された、都道府県単位の鳥類誌のリストを掲載しましたが、その続編を準備しています。編集・出版に関係された方は、そのタイトルなどを編集部までお知らせください。
(川内)

1. ポスター発表について

今大会は、東京に近いこともあり研究発表の数が多く、一般講演の発表時間の割当がきびしくなると考えられます。その上、会場の施設の関係で使用時間が例年に比べて短くなりますので、いつもの大会よりもポスター発表を多くしたいと考えています。このため、ポスター発表の会場として広いロビーなどを確保し、また時間帯も第一日目の午後にセットするなど配慮しましたので、なるべく多くの方がポスター発表にご参加なさいませう希望しております。

2. シンポジウムのお誘い

今大会に、「沼の鳥類の現状と保護—特に水質汚濁に関連して—」をテーマとするシンポジウムを企画しました。範囲の広い主テーマですのでサブタイトルのように問題点を絞り込みました。シンポジウムの内容は次の通りです。

座長：黒田長久 1.陸水学からみた沼（東邦大・理）青山莞爾 2.手賀沼流域開発の水禽への影響と住民意識（山階鳥類研究所）岡 奈理子 3.過栄養湖に生息するカモ類—特にハシビロガモの行動（京大・臨湖）松原健司 4.不忍池のカモ類（上野動物園）福田道雄 5.沼の汚濁防止への課題（千葉県水質保全研究所）小林節子（敬称略）。

各地で湖沼の保護管理問題、調査や研究をされている方々は大勢おられるかと思えます。これらの方々がこの機会にそれぞれの地域の課題などについてポスター発表し、またシンポジウムに参加され、全国の仲間の方々と意見交換なさることを期待します。なお、会員の方でこのような調査や研究など行なっている方をご存知の方は事務局まで推薦して頂ければ幸いです。事務局からも参加のお誘いをしたいと考えています。

Movement

「学術シンポ・三宅島の自然と環境」に参加して

日本科学者会議主催，6月11日午後2時～，於 明治大学 6号館

防衛施設庁が、東京都三宅島に米軍の艦載機夜間発着訓練場（NLP）をつくらうとし、三宅島住民の大多数がこれに反対し社会問題となっている。日本鳥学会でも、特産種を含む多種の鳥類が生息し、学術研究上貴重な三宅島に、NLPを建設することに反対する決議を、1986年度の大会総会で表明した。このシンポジウムには、日本鳥学会も協力団体となっていた。

当日は、約100人の参加者があり、寺沢晴男・三宅島村長らのメッセージにつづいて、5人のパネリストから「自然誌モニュメントとしての三宅島」、「三宅島の鳥と自然」、「三宅島の漁業」、「憲法・地方自治と三宅島問題」、「三宅島農業の現状と問題点」の講演と、文書による「村の産業振興と行政の役割」の計6つの幅広い報告が行なわれた。「鳥と自然」は、日本野鳥の会の樋口広芳さんによ

る報告で、多数のスライドを用いた鳥・花・植生の紹介は、自然そのものが直接多くの人々に感銘を与え、三宅島をあるがままにしておくことの大切さを訴えるものであった。

樋口さんからは、将来アジアの島嶼生物学のメッカとなるような研究ステーションを設立する計画も披露され、参加者一同は改めて三宅島の自然を守っていこうとする意志を強めたことと思う。三宅島では、今後も自然全般にわたる活発な学術研究が展開されようとしている。最後に、濱田隆士氏（日本地質学会・三宅島問題小委員会）の草稿によるNLP建設に反対する決議が採択された。

※ 同シンポジウムの資料を希望される方は、コピーしてお送りしますので、60円切手4枚を同封した封書で、下記にご連絡ください。

〒188 東京都田無市緑町1-1-8 東京大学農学部附属演習林田無試験地 石田 健

(石田 健)

— Mock 教授の公開講演会のお知らせ —

第1回国際鳥学セミナーのため本会が招へいた Douglas W. Mock 教授の公開講演会を、下記のとおり京都・東京・札幌で開催します。Mock 教授は、鳥類の社会生物学の分野で、国際的に著名な学者です。講演は通訳がつきます。会員外の方の聴講も歓迎します。東京会場は参加費 1 人 300 円。

演 題：鳥類における兄弟間のいがみ合い—何故両親は兄弟げんかをとめないのか
(Aggressive sibling rivalry in birds and why parents don't stop the fights)

講 師：Douglas W. Mock 博士 (オクラホマ大学)

京都会場：10月25日(火) 13時から 京都大学理学部本館大講義室(百万遍または農学部前バス停からすぐ近く、動物学教室の向かい側)

東京会場：10月29日(土) 14時から 中野サンプラザ6階研修室3号室(中央線中野駅北口前)

札幌会場：10月31日(月) 13時から 北海道大学環境科学研究科2階講堂(北大正門徒歩約3分)

Mock 教授の滞在日程は下記のとおりです。教授と個人的に面談をご希望の方は、国立科博・森岡(03-364-2311)までご連絡下さい。時間の許す範囲内で、面談のあっせんをします。国際鳥学セミナーの問い合わせは、大阪市大・山岸(06-605-2584)まで。

10月22日(土) 大阪着(成田経由)	27日(木) 大阪から東京へ(新幹線)
23日(日) 広島観光(日帰り)	28日(金) 東京で大学・研究所訪問
24日(月) 大阪市大で国際鳥学セミナー	29日(土) 東京で公開講演
25日(火) 京大で公開講演	30日(日) 東京から札幌へ
26日(水) 大阪市大で国際鳥学セミナー	31日(月) 北大で公開講演
11月1日(火) 札幌発、成田経由シアトルへ	

(幹事)

《会誌刊行の遅滞についてのおわび》 諸般の事情で学会誌の刊行が遅滞しています。申し訳ありません。最新号が36巻2/3号(1987年12月発行)です。現在の予定では9月末頃に36巻4号と37巻1号を刊行できればと考えています。なお、原稿は随時受け付け、レフェリーの校閲の終わったものから印刷に入れますので、投稿をお待ちしています。(編集幹事)

訂 正 鳥学ニュース27号に掲載の XIX Congress of International Union of Game Biologists の開催期日は、本年(1988)ではなく、**来年(1989)**の9月8-13日です。(幹事)

~~~~~ トキ・シンポジウム予告 ~~~~~

日 時：1988年12月3日(土) 午後2時~5時  
場 所：国立科学博物館分館 資料館会議室 (東京都新宿区百人町3-23-1)  
課 題：トキの増殖と保護 — 今後の課題  
演 者：安田 健, 正田陽一, 近辻宏規, 齊藤 勝の各氏の予定

鳥 学 ニ ュ ー ス No. 28

1988年8月1日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1  
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599  
(電話) 03(364)2311

発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷